

学校法人文理佐藤学園西武学園文理中学校1年

上田 壮一郎

僕の祖父は、四十九歳の時に病気で両目とも見えなくなりました。杖や人の肩などの支えるものがないと、外では安全に歩くことができません。僕は、祖父と年に二回ほど旅行に行きますが、祖父の手を僕の肩に置いて誘導をしています。近くをトラックが通り過ぎるたびに、祖父の手にぐっと力が入るのが肌で感じとれます。毎回、僕が学校や家族の話をして、祖父は最近のニュースなどについて話してくれ、とても楽しい時間を過ごします。しかし、祖父は僕の顔を一度も見たことはありません。

僕は、小学一年生の頃からロボット教室に通っていて、祖父や、他の目の不自由な方がより安全に楽しく生活できるようになるのに役立つ盲導犬ロボットを作りたいという夢を持つようになりました。別れるのが辛くなるから盲導犬は飼わないという祖父に、「おじいちゃん、僕が将来おじいちゃんの一生の友達になれる盲導犬ロボットを作ってプレゼントしてあげるね。」と言ってみた時にとても喜んでくれたことは、今でも忘れられません。

僕は今回の租税教室で、税金が一番多く使われているのは社会保障だということを知りました。祖父も、障害者年金をいただいたり、杖などの補装具費や住民税の控除を受けたり、薬や医療費を無料にいただいたりしており、その一部は税金でまかなわれていることを知りました。

「働きざかりの時に働けなくなって収入がなくなってしまい、これからどうしようかと悩んだけど、障害者年金や、いろいろな控除を受けられると知って本当に助かったよ。」と祖父が話してくれました。

祖父が税金に助けられているのも、税金をきちんと払う人がいてこそだと思います。僕の父は、小さな会社を経営していて、所得税や住民税だけでなく、法人税や関税など様々な種類の税金を払っていることを、いつも僕や妹に自慢しています。僕の夢を応援してくれており、「小さくてもいいから自分自身に誇れる事業を興して、税金をたくさん払い、社会に貢献できる大人になりなさい。」と言ってくれます。僕はそんな父を誇りに思います。

日本眼科医会の発表によると、目の不自由な方は年齢とともに増えていき、日本の視覚障害者の半数は七十歳以上、六十歳以上で合計七十二パーセントを占めているそうです。これからますます進む少子高齢化社会は、目が不自由なお年寄りが増え、税金を払う人は減るという社会だと思います。僕は、盲導犬ロボットで目の不自由な方の役に立ち、税金もしっかりと払って、二つの意味で少子高齢化社会に貢献できる人間になりたいと強く思いました。